

判断デザインの最初の一步は、

AIへの 「二つの入力」 「判断デザイン Quick-Q®」

1日1件・2～3分。「発生した事実」と「なぜ、そうなのか？」から、
反応する習慣を**考える習慣へ**・変える

1 発生した事実



実際に起きたことを、
そのまま書く。

+

2 なぜ、そうなのか？



すぐに答えを決めず、
背景を考える問いを加える。



1日1件
2～3分

小さく始めて、毎日続ける。



二つの入力で、
AIが考える範囲を
広げてくれる。

答えを出すのではなく、考えるヒントを得る。



立ち止まる習慣が、
仕事の質を変え、
判断を育てていく。

反応の前に、考える習慣へ。



Quick-Q®は、リクエスト株式会社の登録商標です。登録第7019663号。

反応する習慣を、考える習慣へ。

発生した事実と『なぜ、そうなのか?』。毎日の小さなAI入力から始める。



仕事の中では、
毎日さまざまな事実が発生する

- 急なメールが届く
- 顧客から要望を受ける
- 売上が下がる
- 部下が質問しない
- 現場で問題が起きる



問題は、考える力の有無だけではない

発生した事実と行動の間に、
立ち止まって考える動作が
ないこと。



最初の実践は、二つだけ

1



発生した事実

実際に起きたことを、そのまま書く。

2



なぜ、そうなのか?

すぐに答えを決めず、
背景を考える問いを加える。



毎日の小さなAI入力が、目の前の事実^①に反応する習慣を、
背景と目的を考える習慣へ変えていく。

変えたいのは、**反応する習慣**

問題は、考える力の有無だけではない。



発生した事実**に、すぐ反応してしまう。**



発生した事実



すぐに意味づけする



すぐに対応する



仕事で起きやすいこと



メールの文面どおりに返信する



数字が下がると、すぐ施策を始める



質問しない部下を「主体性がない」と判断する



顧客の要望を、そのまま問題と捉える



見落とされやすい問題



発生した事実と
行動の間に、

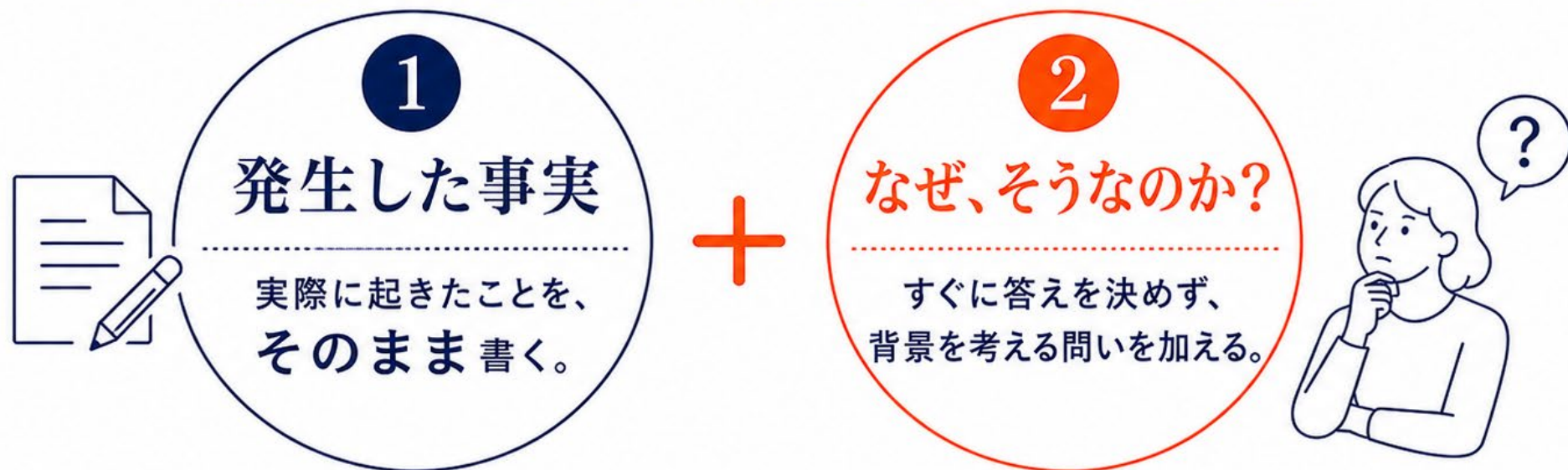
**立ち止まって考える
動作がないこと。**



変えたいのは、対応の速さではなく、**反応の前に考える習慣**である。

Quick-Q®で毎日入力するのは、二つだけ

負担感のある方法ではなく、日常で続く最小の実践から始める。



例

【発生した事実】

〇〇というメールを受け取った

【問い】

なぜ、そうなのか？

最初の始め方



● 1日1件でよい

● 1回 2～3分でよい

● まずは二つだけ入力する

🔄 毎日の小さなAI入力が、反応する前に立ち止まる習慣をつくる。

AIが広げるもの

AIが増やすのは、答えではなく、考える範囲である。



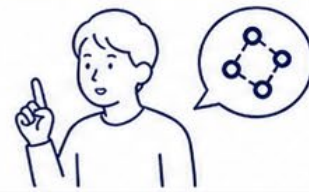
**大切な
区別**

AIが示した内容は、**確認前の仮説**である。
事実は、本人が相手や現場で確かめる。



AIの役割

判断を代行することではなく、
背景・目的・確認事項を
考える範囲を広げること。



AIは、答えを決める道具ではなく、**考える範囲を広げる補助具**にもなる。

小さな入力が、習慣を変える

毎日の小さな動作が、反応から判断へ人を変えていく。

これまで



発生した事実



すぐに意味づけ



すぐに対応

これから



発生した事実



AIへ「なぜ？」



背景と目的を考える

1

発生した事実



客観的に、何が起きたかを記録する。

2

AIへ「なぜ？」



AIに「なぜ？」と問い、問いを深める。

3

背景を考える



起きた背景や要因を、複数の視点で考える。

4

事実を確認する



仮説をもとに、事実やデータを確認する。

5

目的を見る



この出来事の目的や、達成したい価値を考える。

6

判断を選び直す

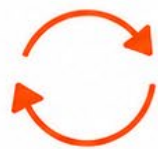


目的に照らして、最適な判断を選び直す。



継続の基準

完璧な分析ではなく、目の前の事実ですぐ反応せず、
一度立ち止まれたか。



毎日の小さなAI入力が、目の前の事実に対応する習慣を、
因果関係と目的から考える習慣へ変えていく。



正解がない仕事でも、 自分で判断し、前に進められる。



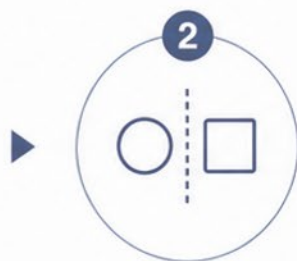
良い行動が生まれる上流には、必ず判断がある。

判断の質が、行動の質と成果を決める。



現場の事実を見る

目的に照らして、
何が起きているのかを
客観的に見る。



違いを捉える

理想と現状のギャップや
パターンの違いに
気づく。



判断する

基準に照らして、
何を優先し、何を
選ぶかを定める。



行動する

判断に基づいて、
自分で決めて
動き出す。



反応・結果を確かめる

相手の反応や結果を
確認し、事実を
集める。



判断基準を更新する

得られた事実から
基準を見直し、
精度を高める。



このサイクルが、判断できる組織をつくる。

お問い合わせ・会社情報



33.8万人

のデータに基づく

組織で働く成人の研究と教育開発

組織行動科学®

Organizational-Andragogy®



お問い合わせ：
判断デザインラボラトリー



E-mail：
request@requestgroup.jp

【会社情報】 リクエスト株式会社

- 本社：〒160-0022 東京都新宿区新宿3丁目4番8号
京王フレンテ新宿3丁目4F
- 会社概要：<https://requestgroup.jp/corporateprofile>
- 代表取締役 甲畑智康：<https://requestgroup.jp/profile>
- 公式サイト：<https://www.requestgroup.jp/>

【企業概要】

リクエスト株式会社（本社：東京都新宿区、代表取締役：甲畑智康）は「より善くを目的に」を掲げ、**980社・33.8万人**の働く人達のデータに基づいた組織行動科学®を基盤に、8つの研究機関からなる企業です。

組織行動科学®は組織で働く私達の思考と行動が「なぜ起こり・なぜ続くのか」を事業環境と歴史・経験から解明し、より善く再現する手段です。

リクエスト株式会社の8つの研究機関



Behavioral
Robotics®
(HOBiROA®) 総研



smart creative
management®
総合研究所



OrgLogLab®
(組織論理学®
研究センター)



XR HRD®
(AIAndragogy®)
研究センター



ABA
Operations
Research®
センター



人的資本開発
プランニング®
センター



判断デザイン
ラボラトリー



公共行動
研究室®